

江戸前の海 学びの環づくり 瓦版 第1号

著者	石丸 隆, 川辺 みどり
雑誌名	江戸前の海学びの環づくり瓦版
号	1
ページ	1-4
発行年	2007-01
権利	Posted with approval of the Edomae Education for Sustainable Development (ESD) program of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT).
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001770/



えどまえ うみ まな わ
江戸前の海 学びの環づくり
瓦版 第1号



江戸前ESD協議会 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学 海洋科学部

持続可能な東京湾をめざして

石丸 隆 (東京海洋大学・海洋科学部・海洋環境学科・教授)

東京湾奥部、「江戸前の海」は、沿岸住民に新鮮な魚介類とともに、穏やかな気候と住みやすい環境を供与してくれています。しかし、過去約40年間の埋め立てにより、ほとんどの干潟や浅瀬が失われました。底泥に堆積した過去の汚染物質に加え、富栄養化にともなう有機汚濁と貧酸素水塊の発生、船舶などにより持ち込まれた外来種の繁殖によって、多くの生物が駆逐され、多様な生物の棲息場であった「江戸前の海」は変貌しつつあります。それでも、わずかに残された自然干潟・三番瀬は多種多様な魚介類の揺籃場であり、沿岸ではアサリ漁業が営まれ、沖では回遊魚類が多くの釣り人を惹きつけています。

このような東京湾がもたらす様々な恵みを将来にわたって人と生きものが共有し享受できるように、「持続可能な江戸前の海」を実現するには、健全な湾環境と生態系を保持するための資源環境利用のしくみづくりが何より求められます。そのためには、まず、私たち湾岸住民が、過去から現在にいたる東京湾の環境と生きものと私たちの暮らしのつながりを実感し、新たな関係性を構築する必要性を感じる事が最も大切です。

東京海洋大学海洋科学部は、東京湾奥部沿岸地域において、「江戸前の海 学びの環づくり—持続可能な沿岸海洋教育」(略称 江戸前ESD)を展開します。

江戸前ESDでは、東京海洋大学海洋科学部を事務局とし、NPO法人ベイ・プラン・アソシエイツ(BPA)(代表:大野一敏氏)、船の科学館、その他、東京湾にかかわる博物館、漁業者、教育者、市民団体などさまざまな関係者と協力しながら、東京湾沿岸域の小中高等学校を拠点に、

- 東京湾奥部の環境・生物・利用について多面的に理解し(知の共有)、
- 海辺を訪ね、また乗船し、海に依拠して生活する方々のお話を聞き(体験の共有)、
- 資源や環境の利用についてともに考え、互いの立場や意見の違いを理解したうえで、合意形成の道をさぐるワークショップをおこない(理解の共有)、

「学びの環」を地域に広げながら、これからの江戸前の海の持続可能な利用のありかたをみんなで考え、実現に向けて行動し、そして世界の沿岸海洋へ視野を広げていきたい、と構想しています。

地域の皆様の積極的なご参加を心からお待ちしています。

石丸 隆 (いしまる・たかし) 「江戸前の海 学びの環づくり」代表。埋め立てられてしまった夢の島で潮干狩り、幕張で海水浴、葛西、浦安でハゼ釣りをして育った。平成元年から、毎月練習船で東京湾の調査をしているが、1年のほとんどが赤潮状態の海を見て悲しい思いをしている。昔の東京湾とは言わないが、もう少し何とかしたいものだと思っている。海と船が大好きで、ベリング海から南極海までが活動範囲。乗船日数は1000日を越える。専門は浮遊生物学。



ESDは持続的発展のための教育 (Education for Sustainable Development) の略です。

江戸前の海 学びの環づくり～私たちが参加します

私たちが今、構想している「江戸前の海 学びの環づくり」（江戸前ESD）の活動計画は右ページのとおりです。

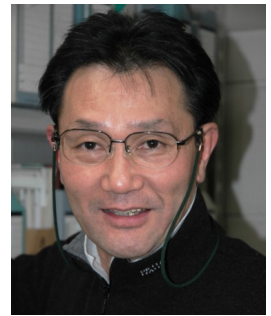
知の共有（江戸前の海について学ぶ「カフェ」）、体験の共有（海辺を訪ね、お話を聴き、海の体験を共有する「耳袋」）、理解の共有（意見や価値観の異なるなかで理解し合うワークショップ「寺子屋」）の3つの活動を行きつ戻りつしながら、みんなで持続可能な江戸前の海のありかたを考え、できることから始めていきたいと考えています。

以下は、それぞれの活動（カフェ、耳袋、寺子屋）の中心となる3人からのメッセージです。

（江戸前ESD瓦版編集委員会）

河野 博 （こうの・ひろし） 海洋環境学科 教授

専門は**仔稚魚形態・生態学**。東京海洋大学の助手となった十数年前に、大学の地政学的観点から東京湾の魚類に目覚める。現在、『東京湾の沿岸・沖合域が仔稚魚にどのような場を与えているのか』をテーマに研究中。これまでの十数年間の学生との協同研究の成果は、2006年夏に『東京湾魚の自然誌』として平凡社から上梓した。江戸前ESDではカフェを担当。専門的な眼から、いい意味での『岡目八目』的に活動を支えようかと考えている。欧州の風が似合うと言いたいところだが、助手になる前は7年間ほど東南アジアで放浪生活をしていた。ちなみに、私の卒論と修論はイタリア・シチリア島でのクロマグロの産卵生態です。



カフェ頭です

佐々木 剛 （ささき・つよし） 海洋政策文化学科 准教授

専門は**環境教育**で、江戸前ESDでは耳袋を担当します。

『おサカナを勉強してどうなるっていうの?』と疑問を抱く水産高校の生徒たちを前に、悩んだ教師(当時)は一念奮起。『子供たちに興味関心を持たせるためには?』と地元岩手県『閉伊川』のフィールド調査に出かけました。ある日、生息が確認されていなかった『ワカサギ』を生徒たちが発見。以来、12年間ワカサギや他の水産生物の生活を追い続けました。

身近な水圏環境を教材とすることで、様々な発見と感動が生まれ、生徒たちのサカナへの関心や環境意識が高まるのです。2006年度から東京海洋大学に移りましたが、『身近な地域で子供たちとともに活動』の姿勢は変わりません。

『わっ、すごい!』『どうしてなんだろう?』『へえ～そうだったんだ!』

こうした感動を江戸前の海で一緒に探しませんか?



耳袋頭です



池田 玲子 （いけだ・れいこ） 海洋政策文化学科 教授

専門は**日本語教育・日本語表現法・コミュニケーション論**です。鳥取県境港市出身の浜の女です。

東京海洋大学に勤務するまでは、私の「海辞書」は日本海版しかありませんでした。しかし、この大学では海の専門家や海好きな学生たちに囲まれ、毎日窓からは東京の海と船を眺めていると、私の中に異変が起きています。江戸前ESDの活動への参加をきっかけに、もっと素敵な海辞書の改訂版を作ろうかと思ひ立ちました。

私の担当は、これから江戸前ESDに参加してくださる様々な背景にある人同士の「協働の学び」の場をデザインすることです(学び手でもあり)。人の想像力と創造力が可能にすることは何なのかを知りたいと思っています。



寺子屋頭です

目的 「江戸前の海」の持続可能な利用のありかたを考える

- ◆ 本学教員・院生を話題提供に派遣、
- ◆ 学生が設営スタッフとして参加

「江戸前の海 寺子屋」
理解の共有～ワークショップ
 海の資源環境の利用について異なる意見を持つ人々がワークショップを開き、互いの立場や意見について理解を進めながら、合意形成の道を探る方法を伝える。

寺子屋を軸に
 耳袋・カフェ
 を実施する

- ◆ 練習船の活用
- ◆ プログラム作成・実施に本学教員・学生がスタッフ参加

「江戸前かわら版」
情報の共有
 江戸前の海ESD活動の広報を行い参加を呼びかける

- ◆ 本学教員を講師派遣、
- ◆ 学生が運営スタッフ参加

「江戸前の海 耳袋」
体験の共有～海を訪ねる
 海辺を訪ね、船に乗り、海を生業の場とする方々から海や町の変貌、現状についてお話を伺い、江戸前の海の体験を共有する。

「江戸前の海 カフェ」
知の共有～江戸前の海を知る
 江戸前の海を多面的に知るために、漁業者・釣り人、自然保護活動家・研究者などがそれぞれの立場から話題を提供し、気軽に語り合う場を開催する。

江戸前ESDの活動


—カフェ／耳袋／寺子屋を巡りながら—



私たちも参加します


「江戸前の海 学びの環づくり」には、本学のさまざまな専門の教職員と学生が参加します。今回は、本学教職員からなる「江戸前ESDワーキング・グループ」から3人のメッセージをひとつずつお届けします。




 **海洋物理**を専門にしています。物理というと、難しくイメージがわからないという印象がありますが、海水の環境形成において非常に重要な要因です。江戸前ESDを通じて、少しでもその存在・実際について触れていければと思います。よろしくお願ひします。

(川村 有ニ (かわむら・ゆうじ) 海洋環境学科 助教)

(川村有ニさんは2008年11月、交通事故のため急逝されました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。)

 留学生の**日本語**を担当している大島です。こんなに東京湾に近いところで働きながら、東京湾のことを何も知りませんでした。湾岸地域に暮らす人も年々増えています。「知りたいな」と思ったときの窓口として、江戸前ESDの活動がひろがっていくといいですね。

(大島 弥生 (おおしま・やよい) 海洋政策文化学科 准教授)

 **図書館**の岩松です。あまり知られていませんが、海洋大の図書館は学外の方も紹介状なしで閲覧・コピーができて図書を借りることができるオープンな図書館です。この江戸前ESDのために図書館が何ができるかを目下、模索中。ご意見・ヒントを歓迎いたします。

(岩松 浩子 (いわまつ・ひろこ) 附属図書館 情報サービス係)

“ESD”ってなんのこと？ ～持続可能な発展（開発）のための教育 川辺 みどり（海洋政策文化学科 准教授）

この瓦版にときどき出てくる“ESD”という言葉、どうい
う意味かご存じですか？

「E“は”えどまえ”の“え”だよな。」

「“SD”って、シ(S)ンド(D)ロームの略？」

「わかった、“えどまえシンドローム”だ！」

うーん、ちょっとちがいます。



ESDは、Education for Sustainable Development、
すなわち、「持続可能な発展（開発）のための教育」の
略なのです。

「持続可能な発展（開発）」をひとこと言えば、「将
来の世代も、現在と同じように自然資源環境の恵みを
享受できるような社会づくり」と言えましょう。この実現
に向かって、今、私たちがいる社会を将来どうい
うものにした
いか、何をどのようにすればそれはできるの
か、みんなで考え、行動する、そのための教育がESD
です。

従来の環境教育が「人が自然とどうつきあうか」に重
きをおいていたのに対し、ESDでは、「人と人とがどう
つきあうか」、「いろいろな人たちが暮らす共同体の中
で、どのように、どういうルールをつくって、どうやって
守っていくのか」を考えていくことも同じくらい大切で
す。したがって、ESDの対象は自然資源・環境にとど
まらず、その保全をはばむさまざまな社会の課題を扱
います。

ESDの方法は、従来の学校教育のような先生が生
徒や学生に知識を授ける一方通行ではありません。
自分の目をおして社会に存在する価値や課題に気
づき、問題のつながりや構造を理解し、その解決策を
みんなで探っていきます。この「協働の学び」の過程こ
そがESDの真髄ではないかと思えます。

1992年に開かれた「国連環境開発会議」（地球サ
ミットまたはリオ・サミット）以来、「持続可能な発展（開
発）」は人類共通の目標とされてきました。これを実現
するためには教育がきわめて重要であるとの認識か
ら、2002年「持続可能な開発に関する世界首脳会議」

（ヨハネスブルグ・サミット）において日本政府は
「国連 持続可能な発展（開発）のための教育
の10年」を提唱し、2005年から世界各地でESD
が進められています。

江戸前ESDは、平成18年度環境省「国連持
続可能な開発のための教育(ESD)の10年」促進
事業に採択されたことをきっかけに始まりまし
た。環境省事業は今年3月で終了しますが、江
戸前ESDに関わる人たちは、これからずっと続
けよう、と意気軒昂、めざすは「持続可能な江戸
前ESD」です。 (かわべ・みどり)

☆ ESDについては、特定非営利活動法人「持続
可能な開発のための教育の10年」推進会議
のホームページ <http://www.esd-j.org/> に詳
しく書かれています。



編集後記



江戸前 ESD 瓦版編集委員会の川辺です。ど
うぞよろしくお願ひいたします。

江戸前 ESD 最大の課題は、「誰を巻き込ん
で、どう学びの環を広げていくか」です。

品川にある東京海洋大学海洋科学部には、目
の前の東京湾の生き物、水質、流れなどを対象
に研究している研究者、専門の先生たちがたくさ
んいます。でも、ことは ESD、ふだんの大学の授
業とは勝手が違います。

そこで、まずは本学学生を対象にやってみよ
う、ということになりました。昨年 10 月に開講した
海洋政策文化学科授業(2年次対象)の「地域
政策論」(川辺担当)をパイロット授業とし、NPO
法人 BPA の大野一敏さん(船橋漁協組合長)、
他の関係する先生方にご協力いただきながら、
「耳袋」→「寺子屋」→「カフェ」と柱となる3つの
活動を一巡しようとしています。授業の様子、履
修した学生の感想などを折をみて紹介します。

(川辺)

発行 江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477 東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学海洋科学部江戸前ESD事務局内
電話/FAX 03-5463-0574 (川辺研究室)
電子メール edomae@kaiyodai.ac.jp

この瓦版は、平成20年度(財)日本生命財団学際総合研
究助成をいただき、2007年1月に初版発行した瓦版第
1号の第3版として作成したものです。